

1999年度修士・卒業論文要旨

■ 修士論文要旨 ■

開発過程における女性の「参加」とその背景——サモアにおける女性省のソーイングプログラムを事例として——

倉光 ミナ子

1990年代以降、「参加」の概念は開発プロジェクトに必要な不可欠な要素として、あらゆる開発諸機関からその重要性が認められてきた。開発研究においても、「参加」の有効性をめぐって議論が盛んに行われているが、その関心の中心は「参加」が行われたプロジェクトの結果にあり、そこになぜ住民が関わってくるのかという住民の「参加」への動機に対して視点が向けられることはあまりなかった。しかし、「参加」が住民のニーズに即した開発プロジェクトを行うことを意味するならば、彼ら自身の視点で住民「参加」を考えることが重要ではないだろうか。このような関心から、本論文では、住民が開発プロジェクトに「参加」する動機に注目して、「開発」における「参加」のあり方を再考することを目的としている。研究では、特に女性の「参加」に焦点をあてて、その現実を見るために、サモアにおける女性省のソーイングプログラムで調査を行った。

フィールド研究に入る前に、現在の開発パラダイムにおいて、女性「参加」がどのように語られているのかを明らかにするために、Moserが分類した5つの女性政策アプローチから女性「参加」のあり方について検討した。その結果、本論文では、①女性に新たな労働負担をもたらさない、②既存の社会におけるジェンダーによる役割分業を問い直す契機となる「参加」であり、かつ③「参加」を通して今まで得られなかった新たな自信を女性にもたらすというような「自己開発」の過程

を含んだ自主的な「参加」、という3点を現在の開発パラダイムにおいて語られるより望ましい女性「参加」のあり方として捉えることにした。

フィールドであるサモアはポリネシア地域に属する島嶼国である。産業の中心は根菜類を主とした農業である。労働人口の60%以上が生存維持経済を営んでおり、貨幣経済の大部分は、ニュージーランドを中心とした移民社会からの送金によって支えられている。特徴的なのは、「ファアサモア」と呼ばれるサモア独自の「伝統」にある。その社会システムは「アイガ」と呼ばれる親族グループを基盤にしている。「アイガ」では、マタイ（家長）を頂点にして各個人の「位置」が定められており、その「位置」に期待される「アイガ」への責任を果たすことが個人の希望より優先される。サモアでは、依然として「ファアサモア」が個人行動の規範となっており、人々の日常労働もこの「ファアサモア」に基づいたジェンダー・年齢別役割分業によって成り立っている。

サヴァイ島にある、女性省の支部の女性コミュニティセンターが実施しているソーイングプログラムは、裁縫という技術を女性たちに習得させることで、世帯の所得向上を図ることを第1目的としている。調査では、①村におけるコミュニティ開発プログラムに来た女性、②センターのソーイングコースに来ている女性、そして③コースを修了した女性を対象とした。その結果、女性の個人背景は、年齢、配偶者関係、同居の形態、家族成員、世帯における経済状況などによって実に多様であること、そして、これらの多様性には現在、生存維持経済から貨幣経済へと移行しているサモア社会が反映されていることが明らかになった。

プログラムに女性たちが「参加」する動機は2つに分かれていた。第1に、女性省が意図したように、女性は、技術の習得によって、「伝統衣服」や子どもの制服にかかる高額な衣服代の削減と、増加する現金への必要性に対する家計の補助を考えていた。第2の理由は、女性たちの家庭内役割に対する認識に関連していた。「母」や「妻」といったジェンダー役割を自覚している既婚女性た

ちは、「女性の仕事」であるソーイングを習得することでその役割をより高度に達成できると考えていた。一方、若い女性たちはソーイングをすることで、両親を中心とした「アイガ」に対する責任を果たそうとしていた。概して家計の補助という意識にもこのような役割観から影響を受けているので、女性たちがソーイングプログラムに「参加」する理由の背景には「ファアサモア」による行動規範が大きく関連しているといえる。

サモア女性の「参加」の現実と現在の開発パラダイムにおいて語られるより望ましい女性「参加」のあり方を比較してみると、上述した3つの点全てにおいて相違が観察された。そして、サモアという地域のコンテキストに基づいて考察されたサモア女性の「参加」は、「開発」における「参加」が複雑であること、それゆえに「参加」が「オルタナティブな発展」を提示していく可能性を有していることを示していた。

以上より、「開発」において「参加」の概念が「オルタナティブな発展」として構築されていくためには、発展途上国におけるダイナミックな“地域性”を明らかにすること、そして、それを開発理論や実践の場にフィードバックしていく方法を模索していくことが必要であるといえる。

■ 卒業論文要旨 ■

愛媛県南予地方の鹿踊： 伝統芸能と生きる人々

栗田 文

愛媛県南部、南予地方に伝わる伝統芸能「鹿踊」の現状を、関係者からの聞き取りや祭礼での観察から記録した。また、地域住民と伝統芸能の関係を考察し、その問題点やそれに対する試みを調査した。鹿踊は、江戸時代に伊達氏が仙台から宇和島に転封された時、伝えられ、変化した。また、南予各地でも伝播した結果、様々なバリエーションが見られる。本研究では、宇和島市裡町の八つ鹿踊、城川町遊子谷の七つ鹿踊、長浜町櫛生の五

つ鹿踊、城辺町緑の五つ鹿踊、御荘町貝塚の五つ鹿踊というコントラストがはっきりした五つの鹿踊を詳細に調査した。その結果、地域性、人々の思い、伝承の困難さと各地の試みを検証できた。伝統芸能が容易に消滅すること、伝承・保存の困難さ、後世に伝えようとする人々の熱い思い、人々の自信と誇りが良くわかった。

喜連川町の温泉分譲住宅地開発と地域社会：定住者の生活史からの考察

佐藤 真紀子

栃木県喜連川町では、地域活性化のため、「フィオーレ喜連川」という温泉分譲住宅地が開発された。転入者の大部分は、首都圏からである。新世代のニュータウンということだったが、その多くは、老夫婦が定年後のセカンドライフを送る住宅地となっている。過疎化を食い止めたものの、高齢化の歯止めとはなっていない。一方、定住ではなく、別荘として購入した人々もいる。また、市街地から離れているため、旧来のコミュニティとのつながりはない。多様な価値観を持つ人々が、この新しい地域社会を形成している。地域社会の特徴を考えるため、定住者8世帯にインテンシブなインタビューを試み、各世帯の生活史を詳しく検討した。その結果、ここに移住した背景や理由が明らかになった。老夫婦は、リゾート的な環境に魅力を感じ、移住してきた。若年夫婦は、交通の便が悪くないので、通勤など地理的な要因で移住してきた。単身者は、自然環境の魅力に引かれ、移住してきた。

高松市丸亀町商店街におけるファッション品店の展開と活性化について

永井 摩衣子

高松市中心部は7つの商店街から成っている。三越百貨店に近い、北部の丸亀町商店街はミセス向け、南のである商店街ほどヤング向けと、以前は、